



「学生による授業評価アンケート」用紙の教員への受け渡し

今号は、Moving Forwardで「学生による授業評価アンケート」を特集しました。授業評価アンケートから得られた知見と、その知見を授業改善に繋ぐための具体的な活動展開、さらにはその活動を通じて学生と教員の間で共有されたことをレポートしています。

大学こぼれ話（第3話）では、立教に医学部ができるはずだったお話、Close Up NEWSでは私語の問題を取り上げました。

CONTENTS

Moving Forward

特集 「学生による授業評価アンケート」

1. 授業改善につながる新たな発見へ
2. 学生の声を授業改善に活かすために
3. 「学生による授業評価アンケート」の概要

大学こぼれ話

Close up NEWS

特集「学生による授業評価アンケート」

授業改善につながる新たな発見へ

- 分析結果サマリー -

大学教育開発・支援センター
副センター長 大野 久

おしなべて高いが一部低い評価項目も

2005年度の授業評価アンケートの項目別の平均値を示したものが **図表1** です。その平均値を見ると、「授業の進め方」、「授業の内容」、「総合的評価」のいずれも5点満点で、3点

台後半の評価です。おしなべて学生の講義への評価は高いといっているでしょう。しかし、「授業への取り組み方」や「授業の進め方」の一部に評価の低い項目もいくつかありました。

授業改善の効果が経年調査から判明

多くの大学で「授業評価を繰り返しているが、何も変わらない。疲れた」という話をよくうかがいます。立教大学の場合はどうでしょうか。 **図表1** では、全学の2005年度項目平均値および2004年度との比較も示しています。右端の**印は統計的に意味のある（誤差とは考えられない）平均値の変化があった印です。1項目を除いてすべての項目で数値が向上しています。その差は一見小さいのですが、のべ6万人もの学生の平均値がこれだけ上昇することは偶然ではないことを示しています。少なくとも授業評価1年目の2004年度と比較して2005年度に、授業改善の効果が現れたといっているでしょう。

予習復習が足りない学生たち

それと同時に、いくつかの問題点も見えてきました。-6「予習復習時間」、-3「履修にあたっての十分な準備」、-4「発展的な勉強」の項目では、他の項目に比べてずいぶん低い平均値でした。授業に出ている学生たちでも、予習復習にはエネルギーを使っていない実情が見えてきます。これは、学生たちの意欲の問題もありますが、一方で教員側からの授業外での学習を促すような工夫のないこと、大学側に学生の授業外での学習を支援するようなシステムがないことも問題です。立教大学ではこの結果を受け、さっそく学生たちが授業以外でも学習できるような自習スペース設置の検討を始めています。

目立って評価が低い「板書のしかた」

2つ目の問題点として、「授業の進め方」の中で、-7「板書のしかた」だけが目立って低得点でした。この点についても、立教大学では教員と学生による授業評価に関するワークショップを開くなど、様々の取り組みを試みています。そうした中で分かってきたことは、たとえば、今の学生の約半数は、高校までに英語の筆記体表記を習ってきていないこと、教員の書く草書のように崩した文字は学生に読めないこと、などです。これでは、教員がこれまで通り、スラスラと板書していたのでは、学生たちが読めません。また、今はやりのパワーポイントも、

図表1 2005年度項目別平均値および2004年度との比較

		年度	度数	平均値	標準偏差	
授業への取り組み方	1 授業全体を通じての出席率(5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	2004	60,495	4.37	0.90	**
		2005	59,467	4.41	0.85	
	2 この授業に積極的に参加した	2004	60,501	3.58	1.09	**
		2005	59,476	3.60	1.07	
	3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2004	60,449	2.65	1.04	**
		2005	59,407	2.72	1.06	
4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2004	60,375	2.72	1.11	**	
	2005	59,359	2.81	1.13		
5 シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	2004	60,190	3.18	1.08	**	
	2005	59,152	3.22	1.08		
6 授業の予習復習等に毎週当てた時間(5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2004	60,388	1.56	0.84	**	
	2005	59,361	1.61	0.89		
授業の進め方	1 聞きやすい話し方だった	2004	60,498	3.68	1.16	**
		2005	59,460	3.70	1.15	
	2 各回の授業内容の量が適切だった	2004	60,448	3.72	1.02	**
		2005	59,438	3.77	1.01	
	3 各回の授業のねらいは明確だった	2004	60,404	3.71	1.04	**
		2005	59,403	3.76	1.03	
	4 各回の授業内容は明確だった	2004	60,335	3.73	1.05	**
		2005	59,324	3.77	1.03	
	5 十分な静粛性が保たれた	2004	60,342	3.68	1.20	**
2005		59,327	3.68	1.18		
6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2004	60,296	3.55	1.12	**	
	2005	59,277	3.61	1.09		
7 板書のしかたが適切だった	2004	60,061	3.04	1.13	**	
	2005	59,094	3.10	1.13		
8 映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	2004	59,776	3.29	1.29	**	
	2005	58,824	3.39	1.26		
9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2004	60,261	3.98	0.94	**	
	2005	59,243	4.01	0.93		
授業の内容	1 新しい考え方・発想に触れた	2004	60,424	3.74	1.02	**
		2005	59,389	3.81	1.01	
	2 基本的知識が得られた	2004	60,422	3.80	0.98	**
		2005	59,387	3.83	0.97	
3 テーマが現代的な意味を持っていた	2004	60,385	3.81	1.04	**	
	2005	59,351	3.83	1.04		
4 最新の学問成果に触れた	2004	60,319	3.35	1.04	**	
	2005	59,258	3.40	1.04		
総合的評価	1 わかりやすい授業だった	2004	60,409	3.61	1.15	**
		2005	59,370	3.65	1.13	
	2 授業全体の目標が明確だった	2004	60,400	3.65	1.04	**
		2005	59,353	3.71	1.04	
3 学問的興味をかきたてられた	2004	60,395	3.45	1.14	**	
	2005	59,353	3.51	1.13		
4 この授業を受けて満足した	2004	60,394	3.56	1.15	**	
	2005	59,349	3.62	1.13		

注1: 項目の回答は5段階評定(5=大いにそう思う、4=そう思う、3=どちらともいえない、2=あまりそう思わない、1=そう思わない)で行われた

注2: 無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に意味のある差がない

*や**がついている場合、2つの科目の平均値には、統計的に意味のある差がある

「照明を落とされるとノートが取れない」「プリントアウトがないと画面をノートにとりきれない」など、実に多くの問題が分かってきました。教員同士でも教材提示の方法について「やはり、パワーポイントだ」「いや、プリントの方が作業も入れられる」でも、板書のノートテイキングのスキルも大事！」などの議論が活発に飛び交いました。これからはぜひいぶん改善されていくでしょう。

約半数の学生は授業に出席せず

アンケートへの回答者数と履修者数の割合を示したものが**図表2**です。この表を見ることでアンケートを行った週の学生の授業への出席率が分かります。これを見ると全学で43%、決して高い数字とは言えません。この値についてワークショップなどでも話題になりました。この点に関しては、学生の問題以外にも、学問の性質上、試験の成績を重視して出席を重視しない授業が存在することなど、これから考えていかなければならない点がたくさん見つかりました。

学部によって評価に格差

図表3は、-4「この授業を受けて満足した」の項目の平均値を学部間で比較したグラフです。学部によってかなりの数値の違いが見られます。この結果を受けて、得点の低かった理学部は、卒業生や大学院生への調査を行いました。その結果、「学部時代は基礎からの積み上げのカリキュラムの意味が分からなかったが、社会に出てからその意味がよく分かった」「社会に出てから役に立つ学習内容だった」という意見が寄せられました。このように学問の性質上、有意義であるにもかかわらず、すぐには目に見える効果が見られず、評価の数値につながらない学部もあるようです。

授業規模が小さいほど満足度は上昇

図表4は、-4「この授業を受けて満足した」の項目の平均値を授業規模（回答者）で比較したグラフです。これを見て分かる通り、授業規模が小さいほど満足度は上がります。経済学部では従来の大規模授業を解消しようと、授業規模を小さくしました。こうした取り組みが授業改善につながっていくことでしょう。

上級生ほど高くなる授業評価

図表5は、-4「この授業を受けて満足した」の項目の平均値を学年間で比較したものです。このグラフに見るように、学年が進むにしたがって得点は上昇します。1、2年生のうちは、必修の科目や概論的な内容が多く、学年が進むと、自由な選択でより専門的な授業が受けられるので満足度が上がるのかもしれませんが、原因はさらに調べないと分かりません。

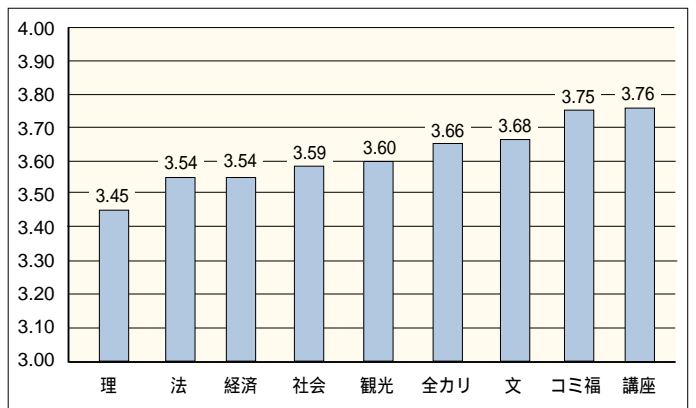
このように、授業評価アンケートの結果から、今まで気づかなかった多くのことが明らかにされました。こうした発見を授業改善につなげていただけるように努力を続けていきたいと思えます。

図表2 回答者数と履修者数の比較

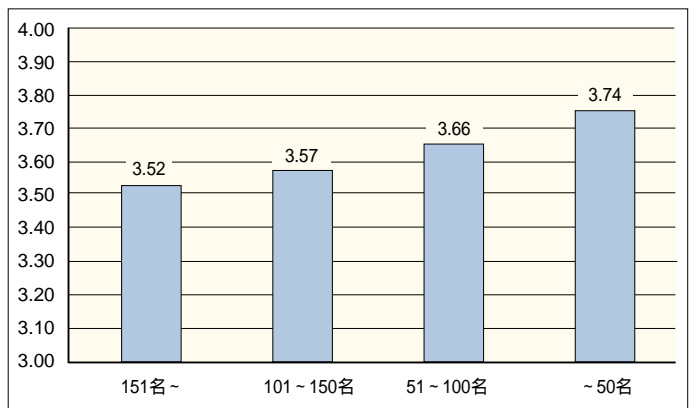
	05履修者	05回答者	05回答/履修(%)	04履修者	04回答者	04回答/登録(%)
文	16,935	9,154	54.05	16,030	9,391	58.58
経済	22,958	7,653	33.33	22,663	7,269	32.07
理	5,950	2,882	48.44	5,981	3,311	55.36
社会	15,725	6,383	40.59	16,544	7,145	43.19
法	21,049	6,977	33.15	21,681	7,223	33.31
観光	7,961	3,761	47.24	7,169	3,122	43.55
コミ福	7,698	3,974	51.62	7,159	3,694	51.60
全カリ	35,256	16,104	45.68	37,744	16,963	44.94
講座	3,808	2,722	71.48	3,309	2,485	75.10
合計	137,340	59,610	43.40	138,280	60,603	44.34

注：本分析における「回答者」とは、アンケート実施科目に当日出席し、アンケートに回答した学生のことを示す。よって、この問題について検討する際、授業へは出席していたがアンケートには回答しなかった調査協力者が存在する可能性も、考慮すべきである。

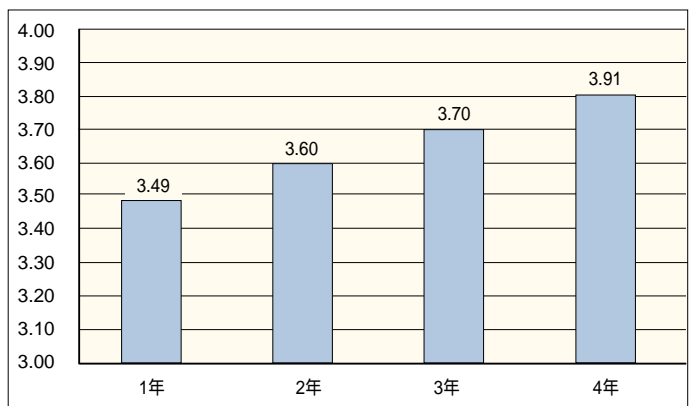
図表3 「IV-4この授業を受けて満足した」に関する学部間比較



図表4 「IV-4この授業を受けて満足した」に関する授業規模比較



図表5 「IV-4この授業を受けて満足した」に関する学年間比較



学生の声を授業改善に活かすために

大学教育開発・支援センター
学術調査員 茂垣 まどか

ワークショップから見えてきたもの

過去3回のワークショップを実施

前稿では、授業評価アンケートの数値的結果を中心に、わかってきたことを紹介しました。では、教員や学生は、具体的にどんなことを考えているのでしょうか。前稿でも紹介したように、例えば「-7板書のしかたが適切だった」という得点の高低からのみでは、学生が具体的にどんな板書を望んでいるか、ということまでは判りません。また、学生の皆さんに回答してもらっているアンケートをやりっぱなしにすることなく、どんな風に活かすことができるか、ということも大きな課題です。

そこで立教大学では、「学生による授業評価アンケート」をひとつの題材として、授業やその環境をより良いものとしていくための試みをしています。例えば、具体的意見を交換し議論する場として、これまでにワークショップを3回開催しました(06.3.15教職員対象のワークショップ、06.6.12・06.11.16学生・教職員を交えたワークショップ)。ここでは、これらの試みから見えてきたことを紹介します。

授業技術について

筆記体を学んでこなかった学生も

「板書は大きな文字で読みやすく書いてほしい」。そういった学生の希望に応えようと努力しつつも、「崩した文字が読めないという意見にはどのような対応をしたらよいかわからない」という教員の声があがりました。

学生に尋ねたところ、大学入学前に、筆記体を必修では学んでいない学生がいる可能性があること、またPCなどの普及により、活字に慣れている学生にとっては崩し文字は馴染みが薄いことがわかりました。



写真1 第1回ワークショップ(教職員対象)の風景

視聴覚教材のメリット・デメリット

「パワーポイントは内容がはっきりわかっていい」「VTRはまさに“百聞は一見にしかず”といった、講義の中で映像や視聴覚教材を積極的に使ってほしいという学生の声が多く聞かれます。しかし実際に教材を準備する教員側は、「パワーポイントの資料を配布すると、学生のノートを取る技術が伸びないのでは」「電気を消したとたん学生が下を向く(寝てしまう)」といった、資料提供や視聴覚教材に関する疑問を感じているようです。学生からも「暗くなると眠くなる」という意見があり、教室環境の整備という設備の側面も重要であることが浮かび上がってきました。

ワークショップに参加していた大学運営に関わる教員からは、これらの議論を踏まえて、手元を明るくしたまま視聴覚教材を提示可能な教室環境を整えるよう検討中である、という発言が示されました。

授業の予習・復習、出欠について

授業外の学びに結びつく課題の提示

授業評価アンケートから、予習・復習時間が少ない(「-5授業の予習復習等に毎週当たった時間:5=3時間以上、4=2~3時間、3=1~2時間、2=1時間未満、1=0時間」で、平均値1.61)ことが示され、その点について学生はどのように認識しているのか、ぜひ聞いてみたいという声が教員から挙がり、議論がなされました。

学生からは、「課題、資料を提示してもらおうと予習・復習に役立つ」「テキストなどが提示されると復習しやすい」「板書がよい授業は復習しやすい」などの意見が出されました。またこの授業評価アンケートは講義科目が対象ですが、「ゼミナール、とくにプレゼンテーション担当の時にはもっと勉強する」という学生の意見が示されました。なおこの点については、別の調査(2005年度カリキュラム評価アンケート)からも同様の結果が示されています。

つまり、予習・復習に関しては、講義における資料や課題の示し方が重要であること、ゼミナールなどのプレゼンテーションが求められる授業ではより予習・復習時間が多いことなどがわかってきました。

出欠を取るべきかについては議論百出

同じくアンケートで回答率(出席率)が低い(約43%)ことが数値的に示されたことから、「学生はなぜ出席しないのだろうか」「出席しなくても単位が取れるからなのか」などの疑問が教員の間で交わされました。出席に関する教員の意見もさまざまで、「学生が出席し講義を聴いてこそ、伝えられること

がある」というものから、「講義を聞きたい人だけ出席してくればよい」という考えまであり、出欠を取るか否かの対応も多様でした。

このテーマについては、学生の意見もさまざまです。例えば、出席は本人の責任であるという立場から、「自分は興味のある授業にしか出席しない。その分、将来の生き方に関わる学外活動を満喫している」という意見もあれば、逆に「努力の過程も評価してほしいので、出席を成績の配分に入れてほしい」という意見も出ました。このほか、「出席しても寝ていて単位を取る学生もいる。試験100%にするなど学生の自覚をうながしてほしい」「正直に言うと、卒業に必要な最低限の単位を取って、あとはバイトなどしたいと考えている人も多い」といった、学生の実態を垣間見るような意見も聞かれました。

このようにさまざまな意見が飛び交いましたが、どの学生にも共通していたのは、「魅力のある講義には出る」という意見でした。

学生の参加意識を高めるには

では、学生にとって魅力的な授業、出席したくなる授業とはどのようなものでしょうか。学生からは、講義のテーマについて「自分の興味・関心が高いテーマであるかどうか」はもちろんですが、例えば、「リアクション・ペーパーを書かされるとやる気が出る。次の授業で書いた内容に対する返答や、回答事例を挙げてもらえると、さらにやる気が増す」「熱意があると感じられる先生の授業はやる気が出る」といった意見も出されました。そして教員からも「リアクション・ペーパーを用いる事で、一方向的にはではなく、学生との双方向的な意思の疎通を心掛けている」などの、授業の工夫例が紹介されました。

教員と学生のコミュニケーションは、教室の構造や履修者数からも影響を受けるので、教員側の要因とばかりは言えません。しかし学生にとって、自分がアイデンティファイされていると感じられること、その他大勢の一人ではないという感覚が、授業への参加意識や期待を高めるようです。

ワークショップ以外の取り組み

カリキュラム全体・学習環境の調査も実施

2004、2005年度の授業評価アンケートを受けた教員のコメントも所見集として出しています。学内関係者に限りませんが、学内の図書館で閲覧できますので、関心のある方はぜひご覧ください。また、『学生による授業評価アンケート』にもとづくRIKKYO授業ハンドブックも大学教育開発・支援センターから発刊しています。このハンドブックは、アンケートからわかった学生の積極的学習をうながす授業運営の参考となる工夫をまとめて、紹介しています。さらに、学生生活全般を通じた“学び”を把握するために、カリキュラム全体のバランス、履修のしやすさや施設等の学習環境に関するアンケートを2006年



写真2 第2回ワークショップ(池袋)の学生の発表風景

に実施しました。調査結果については、これから分析することになりますが、今後の教育改善に役立つデータとして学内に提供していきます。

最後に

模索の過程そのものが教育改善を生む

このような学生による声を活かした発展的な取組は今後も続きます。これらの取組を通して、学生・教員の両者にとって、隣の学生(教員)が何を考えているのか、また意見がいかに多様であるか(いかに同じ意見を持つ人もいるか)などの共通理解が得るきっかけにもつながったのではないのでしょうか。また、教室環境に関する改善も進みつつあるようです。

出席や授業方法などについては、今はまだ意見が交換された段階で、よい解決方法を大学全体として模索中です。これらの試みに接してきて、私は、講義のやり方や受講の仕方、さらに広がってカリキュラム全体といった大学教育については、形式的・形態的な正解はなく、どんな授業がよいのか、どんな授業環境が必要なのかといったことについて、学生を交えて大学全体で模索しながら考える過程そのものが、大学の教育を良くしていくのではないかと感じています。



写真3 第3回ワークショップ(新座)の学生の発表風景

「学生による授業評価アンケート」の概要

目的

本学の「学生による授業評価アンケート」(以下、授業評価アンケートという)は、2004年度から全学での実施が始まり、本年度で3年目を迎えました。

その目的としては、以下の7点が確認されています。

- 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- 教員同士が授業に関して相互研修を行う機会を提供する。
- 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

特徴

本学の授業評価アンケートには他大学と比較して以下の特徴があります。

1、所見票

アンケートの回答者にどのようにフィードバックするか。これは授業評価アンケートに限らず、アンケートを実施した際には重視しなくてはならない点です。

授業評価アンケートでは、集計結果である数値データと学生の自由記述をもとに、担当教員が所見票を書いています。所見票は、「授業評価に対する担当教員の所見」「自由記述欄に対する担当教員の所見」「改善に向けた今後の方針」の3項目から構成されており、その狙いは、

- 教員がアンケート結果を直視し、自らの見解を発表する。
 - 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
 - アンケートに含まれる自由記述について、教員のコメントを通してその内容を明らかにする。
 - 改善に向けた決意と工夫を書くことにより、次のアンケートとの比較を行い易くし、具体的な授業改善の実現を可能にする。
- ことにあります。

所見票は集計データと共に科目ごとに1シートになっています。所見票をまとめた「所見集」は、当該学部届けられると同時に、学内に公開するために図書館に備えつけられています。

2、学部等総評

授業評価アンケートは、学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料ともなるものです。その目的に照らし、各学部、全学共通カリキュラム、学校・社会教育講座、すなわちすべての教育組織が「学部等総評」を作成します。

集計データのまとめに加えて、教員の所見票に対するまとめ、学生からの意見の集約、今後の授業改善に向けた課題の提示等が記述されています。

3、全学総評

授業評価アンケートを、大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料として活用している一例が「全学総評」の作成です。

「全学総評」では、集計データから読み取れる全体的な傾向や、学部間の違い、授業規模による比較等と、各学部が作成した学部等総評に拠る所見票に対するまとめ、学生からの意見の集約、今後の授業改善に向けた課題の提示についての全学的な共通点が記述されています。

実施概要

授業評価アンケートは学部講義科目を対象としており、その中には全学共通カリキュラムと学校・社会教育講座も含まれています。専任兼任を問わずすべての教員について少なくとも1科目実施します。

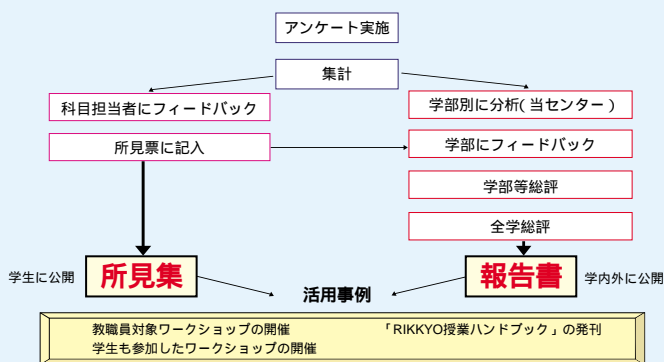
実施科目数は、2004年度951科目、2005年度955科目、2006年度1,053科目となっています。また、延べ回答者数は、2004年度60,603人、2005年度59,610人に上りました(2006年度の回答者数は現在集計中)。

授業評価アンケートは、無記名式の質問紙により授業時に行っています。設問項目の数は23問で、授業への取り組み方、授業の進め方、授業の内容、総合的評価の4部門に分かれています(具体的な項目内容はP.2の「図表1」をご参照下さい)。また、2つの自由記述欄「この授業で良いと思った点」「この授業で改善すべきだと思った点」を設けています。加えて、7問まで各学部が独自の設問を設けることもできます。

結果の活用

授業評価アンケートの結果は、「報告書」にまとめられ、全ての専任教員に配付するとともに、希望に応じ、兼任教員と学生にも配布しています。その他の活用としては、これまで3回の授業評価アンケートワークショップを開催しました(詳しくはP4、5をご覧ください)。また、2006年3月には「Rikkyo授業ハンドブック」を刊行し、専任・兼任の全先生方に配付しました(MOVE第2号で紹介)。

図表6 「学生による授業評価アンケート」の実施フローと集計結果の活用事例



立教の「学部」

新設の歩みを振り返る

センター顧問 寺崎 昌男

挫折した医学部・幻の農学部

立教大学には、聖路加国際病院と現在の聖路加看護大学の前身校とを統合して、医学部ができるはずだった。だが結果において挫折した。

この経過について『立教学院125年史 資料編1』は詳細な史料を収めている。当時の学院総長・大学学長、遠山郁夫の詳細きわまる日記を中心とするものである。なぜそういう構想が生まれたか、どうして挫折したか、経緯はあまりに複雑なのでここに書く余裕はない。はっきりしているのは、1942(昭和17)2月、学院が正式に立教大学医学部の設置認可を文部大臣に申請したことである。

もともと立教大学と聖路加病院とは、大学に医学部を設立する計画の下に、1929年(昭和4)ごろから募金を開始していたとも言われる。また33年(昭和8)には学院側で「立教学院拡大計画」が練られていた。従って9年後の1942年の申請は、突然のできごとではなかった。しかし、史料をつぶさに読んだ上での感想を記すと、病院を含めての統合という大事業は当時の立教学院の手にあまることだったように思われる。さらに大きな背景として、まず戦時下の医療政策と大病院の一大学への吸収という方策とが矛盾したこと、次に文部行政と厚生行政の食い違いが大きかったことなどがあったと思われる。戦時色濃厚ななかでの医療機関の再編という事業は、政府にとってきわめてホットな論題だったと思われるのである。

ところで、医学部や病院の設置がつねに大学にとってプラスに働くとは限らない。特に附属病院の収支が財政の大きな負担になることは、最近の国立大学法人附属病院を見れば明らかである。さらに、聖路加国際病院の最近の発展、当時興健女子専門学校とっていた聖路加看護大学がいま看護師養成界で不動の地位を占めていることを見ると、この挫折は、双方にとって不幸だったとも言い切れない。だが、旧制大学の一つとして発展を続けていた立教学院にとって『総合大学化』のチャンスが一つ失われたことは確実だった。

なお、もう一つ幻に終わったものとして、農学部設置問題もあった。だがこれは文字通り机上プランに終わった。

池袋敷地からあまり遠くない場所に農場を設置し、農学部を造りたい、学科名には「拓殖農業科」を選んでもよい、その中に「南方拓殖農業科」というコースを置いてもよい、といった趣意書案も残っている。これより先き、1943年度からは経済学部経済学科は「国家経済科」に改称され、商学科は消え、その代わりにであろう、経営経済科工業管理班という奇妙な名前の組織が置かれていた。これらの改変構想や模索の背後に、いかにしてキリスト教系大学として生き残るかという難題があったことは否定できない。難題への対応が全体としてどのようなものだったかは、近く解明されようとしている(学院史資料センターの共同研究『ミッションスクールのジレンマ』近刊予定)。

理学部・社会学部・法学部の出発

理学部は1949年(昭和24)、社会学部は1958年(昭和33)、法学部は1959年(昭和34)年にそれぞれ出発した。後の二つは高度経済成長開始の直前である。この時期に立教大学は文字通り「都市型総合大学」への歩みを踏み出したことになる。

理学部は、新制立教大学の発足とともに誕生した。

戦時中、立教は立教理科専門学校を設けさせられていたが、敗戦直前には工業理科専門学校と改称されていた。それをどうするかは、財政が困難を極めた敗戦当時には大きな難題であったろう。立教は、廃絶の方向を取らず、理学部として再出発させる途を選んだ。同じような歩みをした学校に学習院があったが、私学では珍しい選択だった。その後の立教大学理学部は、よく知られているように理論物理学、原子物理学などの領域で武谷三男、服部学など著名な教授たちを集め、声名を高めた。他方、発足当初から物理学科・化学科にそれぞれ生命物理学研究室、生物化学研究室を設けていた。これらは後に化学科に生命理学コースが生まれる基礎になったと見られる。生命諸科学が重視される今日、理学部の特質を發揮し、また全学共通カリキュラム教育に貢献する基盤にもなっている。

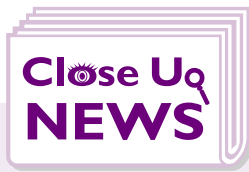
社会学部は文学部社会科(社会学科ではなく58年までは「社会科」。59年に社会学科に改称)が分離独立して創られた。

独立の動きは1952年ごろから始まっていたという。まず「社会学科」にしたい、さらには社会学部にしたいという動きが芽生え、58年に実現した。はじめに社会学科をおき、ついで産業関係学科、最後に観光学科を設けるという順序で整備されていたこの学部は、「実社会の需要」と「社会へのサービス」を強く掲げる複合的学部となった。1998年に観光学部が、2006年に経営学部がそれぞれ独立する。今後は理論的研究を軸とする社会学部として発展することが期待されるが、出発の際には、濃厚な特色が刻まれていた。

法学部の新設は、前史を持たなかったという点で理学部・社会学部と異なっていた。(この項続く)



理学部の設置認可書(1949年3月25日付)



私語問題について

人に配慮する心遣いを持ってほしい

今年度、人権・ハラスメント対策センターから授業中の私語について、実態の把握ならびに対策に着手してほしいとの申し出がありました。立教大学では、これを真摯に受け止め、まず、大学教育開発・支援センターを中心として私語問題についての調査を開始しました。ここでは、現在のところわかっている事についてお伝えします。

授業評価アンケートのなかの「十分な静肅性が保たれた」の平均値を詳しく分析してみてもわかった最も大きな要因は、授業の人数が大きく影響するというものでした。これは、同じ教員が担当しても、少人数の授業では静肅性が保ちやすく、大人数授業ではうるさくなってしまうということを意味しています。

私語の問題についてはワークショップ（P.4参照）でもいろいろと話題になりました。当然ながら、多くの学生、教員は私語を「迷惑と思っている」「してはいけないことである」と考えている事がわかりました。しかし、一方で「気にしない」とか「しても構わない」という少数意見も同時に存在しました。また「私語をするなら、講義に出ないでよい」「出席をとるとうるさくなるから出席をとらない」という意見もありました。学問の性質や科目の位置づけなどによって、少しずつ考え方は違いますが、お互いに迷惑にならないような講義環境を作る

ことは、学生、教員双方の理想であることは間違いありません。

こうした中で、経済学部では、「私語のない授業」を目指す取り組みが行われています。大規模授業の分割や、TA・SAの活用、学部独自のアンケート調査、教員のワークショップなどの取り組みです。その中で、学生が授業中に書き込み、記述をする講義ノートの作成と授業内での活用、TAの有効活用、私語を放置したまま授業を始めないこと、私語に対する注意の仕方など具体的な私語への対応策が示されています。こうした取り組みは、今後、目に見える形の授業改善の成果として現れてくることでしょう。

心理学的な立場から私語に関する問題を考えてみると、その最大の要因は、講義を聴くべき時に私語をする学生たちが人に迷惑をかけているという認識がない、つまり罪悪感を持っていないことがあげられるでしょう。「先生の講義が聴きたかったのですが、周りの学生の私語で良く聞き取れませんでした。とても腹が立ちます」というコメントに見られるように、私語をすることは人に迷惑をかけること、私語は人に対するやさしさが欠けている行為であることに気づき、人に配慮する心遣いを持つことが大切なことでしょう。（大野 久）

MOre Valuable Education MOre Valuable Education MOre Valuable Education MOre Valuable Education

編集後記

文科省はすべての大学や短大に教員の教育能力を向上させるための研修などを義務付ける方針（日本経済新聞07年1月6日付）です。本学の場合、すでに授業評価アンケート結果を活かしてワークショップの開催や授業ハンドブックの発刊など、授業改善につなげる取組を始めており、今後はそれらの取り組みと大学全体の教育力の向上をどのようにリンクさせていくかが課題となるようです。（足立）

「MOVE 第3号」

立教大学大学教育開発・支援センター ニュースレター
2007年2月9日発行

発行 立教大学大学教育開発・支援センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
Tel : 03-3985-4623
Fax : 03-3985-4615
E-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe/>